

雨の多い時節になると、蛙^{かえる}の鳴き声があちらこちらから聞こえてきます。

平安時代中期の書道家で、三筆^{さんびつ}の一人に数えられた小野道風^{おののとうふう}に、蛙^{いつわ}にまつわる逸話があります。

道風^{とうふう}が、自らの書の才能に悩み、書道をあきらめかけていた時のこと・・・。

ある雨の日、道風が散歩に出かけると、蛙が柳の枝に飛びつこうと、繰り返し飛び跳ねている姿を見ました。道風は足を止め「柳の枝は、ずいぶん高い所にある。蛙は到底柳に飛びつけまい」と思いながら、その様子を見ていました。

その時、風が吹き、柳の枝をしならせました。そして蛙は、一瞬低くなった枝に、飛び乗ったのです。

道風はそれを見て「自分はこの蛙ほどの努力をしていない」と改めて思い、書道をやり直すきっかけを得たといいます。

繰り返し飛び跳ね続ける蛙の姿に、道風は絶えざる努力を見たのです。

仏教では、この絶えざる努力のことを「精進^{しょうじん}」と呼びます。

「いそしむことを楽しみ、怠^{おこた}ることにおそれをいただく修行僧は、墮落^{だらく}するはずはなく、すでに苦しみを脱^{だつ}した安らぎの近くにいる」

お釈迦^{しゃか}さまはこのように、いそしむ励む「精進」の大切さを説いています。

道元^{どうげんぜんじ}禅師も、『遺教^{ゆいきょうぎょう}経』というお経を引用する形で「精進」を説いています。

「なんじらはまさに精進^{つと}を勤めるがよい。たとえば、少しばかりの水であっても、常に流れれば、ついによく石^{うが}を穿つであろう。しかし、もし修行者の心が、しばしば怠りすさむことがあれば、火をおこそうとするのに、まだ熱くなっていないうちにやめるようなもので、火を得ようと思っても、とても得られるものではない」

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

同じように、小野道風が見た蛙が、^{なま}怠けていて、飛び跳ね続けていなかったら、風が吹いて柳の枝が低くなった時に、飛び移ることができなかったでしょう。

常に励むことの大切さを、道風が見た蛙は、その姿によって伝えているのではないのでしょうか。

そしてそれは、私たちが限りある命であることを深く見つめることによって^{うなが}促されるものです。

「精進するかそうでないかは、道を求める^{こころざし} 志^{せつじつ} が切実であるかそうでないかの違いである……。志が切実でないのは、私たちが限りある命であることを思わないからだ」

このように道元禅師は、別なところで示しています。

蛙が柳の枝に飛び跳ね続けたのは、強制されたものでは決してなく、自ずと促されるものであったと、小野道風が見たように。

限りある命であることを、深く見つめた時、大切なひとときひとときを、精進して生きようと、自ずと促されるのだということです。

— 終 —